

中部の

# エネルギーを築いた人々

## 電力の激動期に豊橋、浜松・静岡営業所長を務めた 松岡 孝吉

松岡孝吉は、電力界が激動期であった大正末から昭和の初め、豊橋、浜松・静岡営業所長として活躍した第一線の電力マンである。明治12年11月、京都府相楽郡の大庄屋の長男として生まれた松岡は、奈良市の佐々木塾で漢学を修め（明治30年12月）、京都簿記学校に学んだ後、郷里で郡会議員となり、参事会員を務めるなど地方政界で活躍した。



松岡孝吉  
(中部電力浜松営業所蔵)

### 山城水力電気常務取締役

大正6年頃からは地元名望家として実業界に転じた。大正6年4月には笠置水電(大正3年12月開業)の取締役となり、同6年11月和東川水力電気の創立委員長に就任し、8年3月、両社の統合を視野において山城水力電気(和東川水力電気を改称)を創立し、常務取締役に就任した(同年8月、笠置水電を合併)。同社は、相楽郡木津町に本社を置き、和東川発電所(同8年8月運転開始、185kW)を建設し、相楽、綴喜2郡22ヶ町村に電灯電力を供給した。さらに松岡は同社の電力を利用する、西大寺から木津を経て笠置を結ぶ笠置電気軌道を計画し、大正11年3月に申請したが、同年9月却下となった。



笠置水電の株券

(出典：『加茂町史 第2巻 近現代編』)



和東川水力電気創立趣意書 (出典：『加茂町史 第2巻 近現代編』)

## 豊橋営業所長(関西電気・東邦電力)

この頃から相楽郡の小会社にも、電力界激動の波が押し寄せる。山城水力電気は、奈良県を中心に供給する関西水力電気との合併を決め、同社が名古屋電灯と合併(大正10年10月)した後の大正11年3月、関西電気と合併した。このとき、松岡は関西電気の常務取締役神谷卓男から、豊橋営業所長就任を要請される。

関西電気常務の神谷卓男(1871～1929)は、松岡と同じく京都府出身、同志社大学を卒業後、米国に留学(スタンフォード大、コロンビア大)し、帰国後は日本新聞記者、近衛篤磨の秘書官を経て朝鮮に渡り、総督府平安北道内務部長などを務めた。大正2年から6年まで名古屋市助役を務め、その後京都府選出の代議士となるが、名古屋電灯の取締役、常務取締役についていた(その後関西電気常務、東邦電力専務に就任)。名古屋電灯は、当時名古屋市と問題を抱えていたので、彼の手腕が求められたのであろう。



神谷卓男

(出典：ウィキペディア「神谷卓男」、著作権終了。)

さて、豊橋営業所長として松岡に命じられたのは、豊橋地区で起きていた電価争議への対応であった。豊橋電気は大正10年4月に名古屋電灯に合併されたが、これに対して豊橋市民の反発が高まり、同年8月には、電気料金の値下げ問題(10%)へと発展した。電価値下期成同盟会が結成されて、本社まで押しかけ、神谷常務はその対応に苦慮していた。同問題の解決に、10月には川口彦治知事から調停案が出されていた。しかし、その実施に向けて具体的な詰めが残されていた。松岡は、現地の所長として期成同盟会と話を進め、時期の1年延期(その代償として3万5000円を還付)等の条件でまとめ、12月12日の料金値下げ実施案をまとめた。



豊橋電価値下関係記事『豊橋日々新聞』 大正10年10月27日

## 浜松営業所長(早川電力・東京電力)

豊橋の電価問題の解決後、大正13年4月、松岡は早川電力浜松出張所所長代理(7月から所長)になる。早川電力は浜松を含め静岡県全域に電灯電力を供給し、東京進出を目指

していた大手の会社であったが、関東大震災の打撃を受けて、東邦電力に支援を求めた。これにより、早川電力は東邦電力系の会社となり、大正13年3月、松永安左衛門(東邦電

力副社長)が社長に就任した。さらに翌14年3月、安田財閥系の群馬電力と合併し東京電力を創設する。松岡の早川電力入りは同社が東邦電力系に入ったことによるものであるが、東京電力が創設されると、東京電力浜松営業所長へと所属が変わる。松岡は、東邦電力との連系を強化するための送電線敷設問題や、不況下の需要造成対策、特に岡崎電灯の攻勢を受けながら大口工場の契約確保に邁進した。



浜松市伝馬町の日英水電浜松営業所  
(東京電力浜松営業所も同じ社屋)  
(出典：神谷昌志・大塚克美『はままつ百物語 明治大正昭和』)

昭和三年五月	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70
75	80	85	90	95	100	105	110	115	120	125	130	135

東京電力株式会社  
浜松営業所

東京電力浜松営業所 営業広告  
(出典：中部電力静岡支店『静岡県(富士川以西)電気事業のあゆみ』)

電灯料領収証 No.		大正12年 12月 分 従量燃料金	
取付機数	1	電灯料	100
燈火機数	1	燃料料	100
消費電量	100	体燈料	
換		メーター料	
要		計	

大正十二年 12月 27日 領収  
早川電力株式会社 浜松出張所  
集金員印

早川電力浜松出張所 電気料領収書  
(出典：中部電力静岡支店『静岡県(富士川以西)電気事業のあゆみ』)

## 静岡営業所長(東京電力・東京電灯)

昭和2年2月には、静岡営業所長(東京電力)に転じた。しかし、1年後の昭和3年4月には、東京電力は東京電灯と合併したので、松岡も東京電灯へと所属替えとなり、主事となった。同3年7月には、静岡県岡部町に電灯電力を供給する朝比奈水力電気取締役、翌4年3月には社長を兼ねるようになる(昭和12年12月東京電灯に合併)。同年8月には東京電灯調査部に移っている。

このように、地方名家として山城水力電気の常務としてスタートした松岡は、大正末から激変



朝比奈水力電気の発電所貯水槽跡(筆者撮影)

する電気事業の環境のなかで、関西電気、東邦電力、早川電力、東京電力、東京電灯と会社を転じ、第一線の営業所長として、電気料金値下げ問題や昭和不況下の需要開拓に邁進する電力マン人生を送った。

昭和14年頃から電力は国家管理時代に入り、松岡は静岡を去り、郷里京都に戻った。昭和15年4月には京都広済無尽(株)の代表取締役、戦後は昭和産業相互銀行取締役など金融界に身を置き、昭和47年3月、92歳で没した。

(浅野 伸一)